

FLENSカンファレンス2024

「塾生保護者のファン化」と「業務効率化」の実現に向けた
FLENS School Manager 活用事例共有会

FLENSの大生隆洋代表

開発の背景と
課題意識

カンファレンスの冒頭、FLENS株式会社(以下、FLENS)代表取締役社長・大生隆洋氏が挨拶を行い、「School Manager」開発の背景について語った。

大生氏は、教育業界で長年現場に立ち、塾の運営やシステム構築、そして人事評価制度の整備などを通じて、組織全体の成長を目指すマネジメントにも携わった経験をもつ。その中で、大生氏は『学びの場』の価値を高めることが学習成果に大きな影響を与えることを学んだ。同時に、塾の規模や地域性といった限界にも直面。個々の教室や塾の中

9月29日に開催された「FLENSカンファレンス2024」は、FLENS株式会社が主催し、10年以上にわたる同社のサービス提供の集大成としてFLENS School Manager導入塾向けに、初めて開催された。カンファレンスでは、学習塾経営者や教育機関の代表が一堂に会し、「FLENS School Manager」の導入・活用事例を中心に教育現場におけるデジタル化の重要性が議論された。その模様をレポートする。

だけで完結する「場」には限界があると感じ、もっと広範囲に、そして一貫した学びの場を提供する必要性を強く意識するようになる。そのような背景の中、大生氏は、ICTやAIなどのテクノロジーを活用すれば、遠く離れた場所や異なる地域の生徒同士が繋がりが、常

に互いに刺激し合う環境を作れるのではないかと考え、「人×テクノロジーで、学び手と社会を繋ぎ、学びの場」に感動をつくる」というビジョンを掲げる。このビジョンはFLENSの製品にも採り入れられている。

タスク管理で業務効率化と
個別指導の現場でのメッセージ機能活用

本会では、School Managerを導入中の学習塾5社より活用事例が

発表された。

1社目に、湘南ゼミナール(東京都)執行役員の垣田



湘南ゼミナール 運営サポートの久野哲史氏

正明氏、運営サポートの久野哲史氏が登壇。湘南ゼミナールでは、月ごとのタスクをあらかじめまとめ、各部門からのタスクを一元化してSchool Manager

erに登録。これにより、タスクの締め切りや進捗状況がリアルタイムで確認できるようにになり、業務がスムーズに進むようになった。ある参加者からの「どのくらい業務時間や残業の軽減に繋がったか?」という質問に対し、「以前は、メールやエクセルでのパシートなど、多くの情報が分散しており、どの情報がどこにあるか探すのに多くの時間がかかっていましたが、今ではその時間がほぼ半分に削減されました。本部の進捗管理も改善され、タスクの完了状況を簡単に把握できるようになったことで、業務全体の効率が向上

しました」と答えた。2社目に、アップ(兵庫県)が登壇。執行役員の井上隆弘氏、副本部長の西村紘一氏、次長の福永隆宏氏は、特に個別指導や高校受験に対応する場面でのSchool Managerメッセージ機能の活用に関して語られた。この機能により、教師と生徒、または保護者とのコミュニケーションが円滑になり、学習指導の質を向上させる一助となっている。「保護者とのコミュニケーションが以前よりも格段にスムーズになり、特に生徒の進捗状況や質問への対応が迅速化しました」と西村氏は述べ、School M

anagerがもたらす教育現場での時間の有効活用の重要性を語る。「保護者からのメッセージが突発的に来た場合、対応の品質にばらつきが出ることはないか?」という問いに対して、「確かにバラつきは多かれ少なかれ出ますが、スピードに関しては、顧客にご迷惑をかけるほどにはありません。ただ、担当者が長期休暇の際などは、別職員でも状況を確認できるため、対応ができるようにしています。また、内容面では必要に応じて、上長がアドバイスをするなどして底上げを行っております。メッセージの量が増えたことで、以前よ



湘南ゼミナールの垣田正明執行役員



アップの井上隆弘執行役員



アップの西村紘一副本部長



アップの福永隆宏次長

りも保護者や生徒とのコミュニケーションが増え、それによってトラブルの早期

保護者からの高い評価と成績回収業務の効率化

3社目にむぎ進学教室（静岡県）、4社目にプロジェクトリーズ（岐阜県）が登壇。



むぎ進学教室の山田宗一郎副塾長

静岡県浜松市で展開するむぎ進学教室では、School Managerを導入し、保護者満足度の向上と塾運営の効率化を図っている。例えば、個別指導を行う講師に専用アカウントを付与し、指導報告書の作成を簡素化。これにより、

解決にも繋がっています」と答えた。

授業終了後すぐに報告書を作成し、保護者に即時に送信するこ

とができるようになった。報告内容は簡潔にまとめられ、保護者にスムーズに情報が伝わるよう工夫され、School Managerの利用率が上昇し、保護者からの高い評価を得ている。

この指導報告書の作成については、「講師1人で一度に多数の報告書进行处理する際、作業の遅延が懸念される」という質問が会場から寄せられた。これに対して副塾長の山田宗一郎氏は、「簡素化されたテンプレートを使って、30分程度で30人分の報告書を作

成できるように工夫しているため大きな問題はない」と説明した。

岐阜県と愛知県で60以上のリード進学塾・リード予備校を運営するプロジェクトリーズ株式会社では、



プロジェクトリーズ 第一運営本部の古川智丈課長



プロジェクトリーズ 高等部システム開発部の棚橋裕輔主任

School Managerの申込回答機能を活用し、成績回収業務を大幅に効率化に成功している。

第一運営本部課長の古川智丈氏と高等部システム開

発部主任の棚橋裕輔氏は、中学校3年生の公立高校入試において、これまで手作業で行われていた合否情報や得点の回収を、School Managerを通じて一元管理。従来の電話や紙ベースでの回収に比べ、回収率が劇的に向上し、9割以上の得点データを迅速に集めることができたと言

さらに、このデータをもとに講師がフォローアップを行うことで、保護者や生徒との信頼関係が強化された。

この成績回収について「短期間で9割以上の回収率を達成した秘訣とは何か？」という質問があった。これに対して、年間を通じてアプリを活用し、保護者や生徒がアプリに慣れ親しんでいたことが大きな要因であると説明された。

保護者と生徒とのコミュニケーションツール

5社目に、AICエデュケーション（広島県）の専務取締役の大森博文氏と執行役員の大野日出男氏が登壇。広島県の各校舎でSchool Managerを活用し、保護者や生徒との効果的なコミュニケーションを実現している。従来の紙ベースの案内や定期テス

一人ひとりの弱点を補強し、効率的な学習が行えるよう支援している。

「授業や小テストを全教室で統一する取り組みに対して、現場での抵抗があったのでは？」という質問もあった。

これに対して中嶋氏は「以前は、授業の進め方が自由だったため、カリキュラムの統一に抵抗があったのは事実です」と認めた上で、「しかし、講師の負担軽減や準備時間の短縮、離職率の改善を目指すため、標準化が必要だというメッセージを発信し続けました。結果的には、講師や新卒社員の負担軽減という目的を共有すること

で、統一に対する抵抗は徐々に解消され、スムーズに進んだと感じています」と説明した。

＊

カンファレンスを終え、最後にF



FLENSの縣勇介執行役員

LENS執行役員の縣勇介氏が登壇。「新たな学習機能や、来年春に予定している口座振替機能などの追加により、さらに多くの学習塾様にご満足いただけるサービスを提供できるよう努めてまいります。School Managerは、塾生保護者のファン化を促進するご支援と、業務効率化をサポートするためのツールです。引き続き、先生方のご要望をお伺いしながら、サービスの進化を続けてまいります」と挨拶をし、「FLENSカンファレンス2024」は幕を閉じた。

新たに「学習機能」を実装

たポジティブなメッセージを保護者に送信することで、高い既読率を実現。例えば「〇〇さん、100点おめでとうございます」といった個別メッセージを送り、保護者が必ず開封するように工夫している。

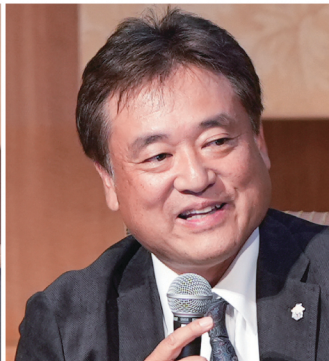
「校舎間でSchool Managerの活用にはばらつきが出ないようにするための工夫は？」という質問

湘南ゼミナール代表取締役の中嶋歩氏がSchool Managerの新機能「学習機能」の活用状況について語った。この新機能は、生徒の学習進捗状況やテスト結果を一元管理できるもので、特に小テストのデータを全生徒からリアルタイムで回収し、個別最適化された学習支援を提供するための基盤を整えている。

中嶋氏は「スマホを活用することで、生徒の理解度をリアル



AICエデュケーションの大野日出男執行役員



AICエデュケーションの大森博文専務取締役